

生消協 青年農業者交流会 報告

- (1) 10月13日(木)JAつくば市谷田部本所大会議室およびZoomによるハイブリッド形式にて青年農業者交流会が開催され、21産地37名、パルシステム関係者11名、総勢48名(内、現地25名、オンライン23名)の参加となった。
- (2) 当日は10:00より、会場参加者による農研機構「食と農の科学館」および「遺伝資源研究センター(ジーンバンク)」視察が行われ、食と農の新しい研究成果や技術展示、在来種の他に海外種子採取を含めた20万点超の種子保管、発芽試験の様子など見学を行い、参加者からは、種子の保存条件や、海外採取の現状、種苗法影響の質疑が行われ、ジーンバンクの研究状況について知見を深めた。
- (3) その後、JAつくば市谷田部本所の大会議室に会場を移し講演および交流会が行われ、冒頭、大津代表による開会挨拶では、「温暖化による農業の影響は甚大、新旧技術の知見を把握し対応を、温故知新、新たなチャレンジにより発展への起爆剤となっていただきたい」と呼びかけられ、坂入幹事による趣旨説明では「農業新技術の環境への影響を共有し皆さんと考えていきたい」と呼びかけられた。
- (4) 続いて、分子生物学者の河田昌東氏による「遺伝子技術と農業への影響」の講演が行われ、GM・ゲノム編集・突然変異の違い、ゲノム編集オフターゲット発生の原因、耐性リスクなどの問題点が挙げられ、安全審査や食品表示の必要性について話された。RNA農薬についてもオフターゲットによる標的外昆虫、作業者の吸引リスクなど、未解明の部分が多数あることが説明された。
- (5) 質疑では、耐性リスクについて「脳と腸に相関関係があり、RNAを腸内細菌が取り込むことで、脳の影響を注視したい」と河田氏よりお答えいただき、「ゲノム編集の酵素開発者自身が、使い様によって生物兵器になり、国際基準が出来るまで使用は危険だと発信している」と警鐘を鳴らされた。
- (7) グループ交流では、6グループに分かれ「なぜ農業をするのか、これからの夢」をテーマに意見交換され、農業の議論では「親の継承で農業を行っており、農業にマイナスイメージがあったが、新規就農者の意欲的な声から気付かされた」「有機やエコチャレンジの一方、農薬使わざる負えない現実もあり、必ずしも農薬は全て悪ではない」目的や夢の議論では「雇用を守り農業を続けるためにも収益は必要」「農の魅力の発信を行っていききたい」など活発な意見交換がされた。
- (8) 最後に、渡部副代表幹事より「パルシステムはGM・ゲノム編集NOの立場。講演では耐性菌問題など良くわかり自信をもってNOを発信したい。近年、鳥獣被害や資源高騰、担い手不足がある一方で農業参入が増えており、若い世代中心に希望と明るい未来が見えてきた。課題はあるが、良いことも大変なことも生消協を通じて想いを共有していきたい」と話され閉会となった。



左画像から (1)ジーンバンク種子保管庫 (2)河田昌東氏 (3)つくば会場 (4)Zoom会場